薊縣獨樂寺

——支那現存最古の木造建築と最大の塑像——

關野貞

緒言

昨昭和六年五月廿九日余は工學士竹島卓一氏と建築家荒木清三氏東道の下に、寫眞師岩田秀則氏を同伴し自働車を驅りて東陵（清の順治、康熙、乾隆、咸豐、同治諸帝の陵の在る處）に往く途次薊縣の城内を過ぎし時、偶ま路の左方塼墻を隔てゝ單層門の立てるを見た。余は一瞥其古建築物たることを知り、自働車を停め旁の小門より入れば、先づ單層四注の山門に「獨樂寺」と題する額を掲げ、門内左右に金剛力士が對立してゐるのを見た。次ぎに重層の大建築觀音閣が巍然として聳え、其内に高さ五十餘尺の十一面觀音の立像が安置されてゐた。其建築の樣式は明かに遼時代の者たることを語り、其彫刻亦建物と同時の者たることを知り、圖らずも支那現存最古の木造建築たる遼時代の遺構を發見せしことを喜んだ。而も當初よりの目的地たる東陵への行程を急いだから、此伽藍の調査は歸途に讓ることゝした。余は初め東陵の調査の爲め寫眞原板三十打を用意せしが、東陵に於て此原板全部を撮影し盡したから、當時東陵の馬蘭峪の一照相館に就き原板の讓與を交渉せしも、唯僅かに一打を得しのみであつた。其中半打を東陵の撮影に費せしため、歸路六月五日此獨樂寺に立寄つた時には僅に半打の準備あるのみであつた。幸に荒木氏所有のフィルムは多少殘つてゐたから之を借りて岩田氏に撮影を托したが、其成績は不幸にして十分とは言へなかつた。其上時間の都合上北平への歸程を急いだから、余は半打の撮影をなせし外、概略の記錄を取り、竹島工學士は主として兩建造物の平面の實測をなせし外、詳細の研究を遂ぐるの遑はなかつた。

余は先づ此獨樂寺の山門及び觀音閣の建築を觀察し、内部の佛像を說き、次ぎに其建築製作の年代を論じたいと思ふ。

一、山門

三間一戸の單層門にして其屋蓋が寄棟造であるのは、古制を遺せるものであらう。低き石壇の上に立ち、前後に石階一處を設けてゐる。柱には膨らみを有し、斗栱は二手先にして、肘木の刳形は凹曲線の連弧より成り、斜めに端を切り去りたる拳端を用ひ、薄き實肘

木を以て丸桁を承け、壁附第二第三第四出の肘木は、通肘木の面より淺く作り出してゐる。斗栱間にはまた二手先の斗栱を容れてゐるが、柱上に於けるものと多少手法を異にしてゐる。

軒は二重垂木にして、地垂木圓に、飛檐方なること普通見る所の如きも、是れは後世の改修に係れるものにして、軒の出も少く且つ木割も小である。

頭貫の端を垂直に切り去り、且つ臺輪を有せざるは古制にして、今中の間にある繪樣持送りと脇の間にある欄間とは後世の附加である。中の間には額を掲げ「獨樂寺」の三字を題してゐる。

床には方塼を敷き、天井は化粧屋根裏を見はし、二重虹梁を架し、其上に板蟇股を載せ、短き束及三斗通肘木にて添桁棟桁を承け、二重虹梁の各端より斜めに方杖を出して、棟桁及び母屋桁を支へてゐるのも古制である。

屋蓋は本瓦葺にして、大棟の兩端に在る蚩尾は頗る古調を帶び、遼代の建築たる山西省大同の上下華嚴寺の大雄寶殿及び薄伽教藏の者に似てゐる。恐らくは當初の遺制と見るべきものであらう。隅下棟の兒棟（ちごむね）の上には、走獸を並べてあるが是れは後世の補修であらう。

木材は内外共に簡單なる彩色を施し、左右側壁の内面に四天王を描いてゐるが後世のものである。

内部前面左右に金剛力士の像を安置してゐる。共に高さ約十六尺後世の修理補彩あれども面貌雄偉阿吽の相を示し、寶冠を戴き、胸飾を着け、金剛杵を携ひ、腕を扼し、兩脚を踏張つてゐる。割合によく筋肉の弛張の狀を露はし、頗る寫實的に天衣腰衣の褶襞及び飛動の狀を作つてゐる。假令後人の補修ありとも大體の姿勢相貌は當初の手法を傳へしものなるべく、建物と共に遼代に屬するものであらう。

二、觀音閣（大士閣）

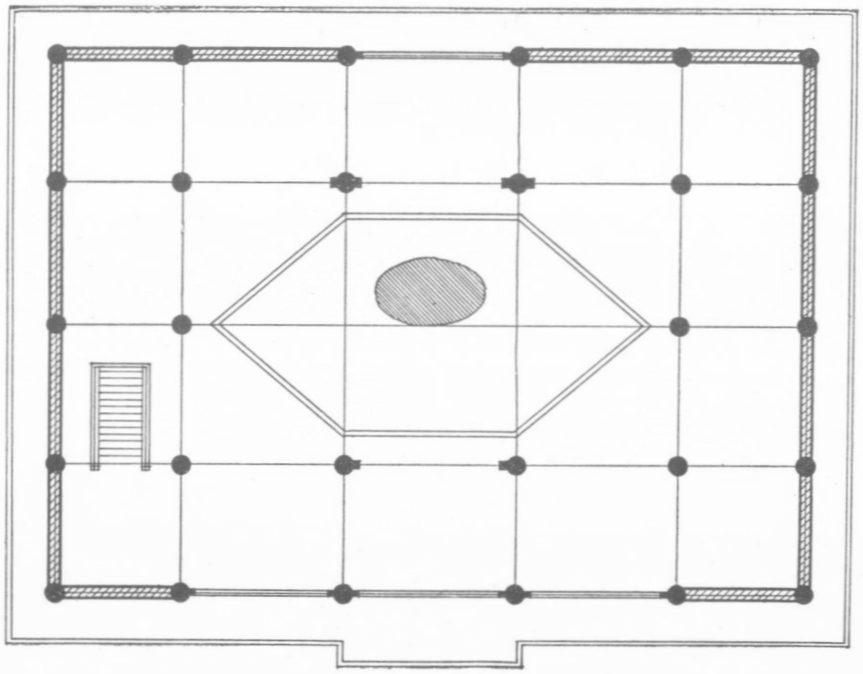
五間四面重層入母屋造の一大佛殿にして、石壇上に立ち前面に月臺を設けてゐる。近世上下層の軒を全部改修せしにより、軒の出は短きに過ぎ、垂木は纖細に失し、斗栱其他の木割の雄大なるに相當せず、以て建物の美觀を大に損傷せしは惜むべきである。

初層は前面中央三間背面中の間一間を入口となし、兩端の間及び東西北の三面を塼壁としてゐる。柱は太くして膨みを有し臺輪を用ひず、斗栱は四手先にして、金剛門に於けるが如く連弧形の刳形を有せる肘木と、其端を斜に切り去りたる拳端と、低き實肘木とを有し、斷面圓なる丸桁を以て二重垂木の軒を承けてゐる。其小天井と支輪とは後世の改修であるが、多少當初の餘影を遺せるものであらう。壁附の肘木は二手先の肘木以上何れも通肘木より作り出せること、金剛門と同樣である。

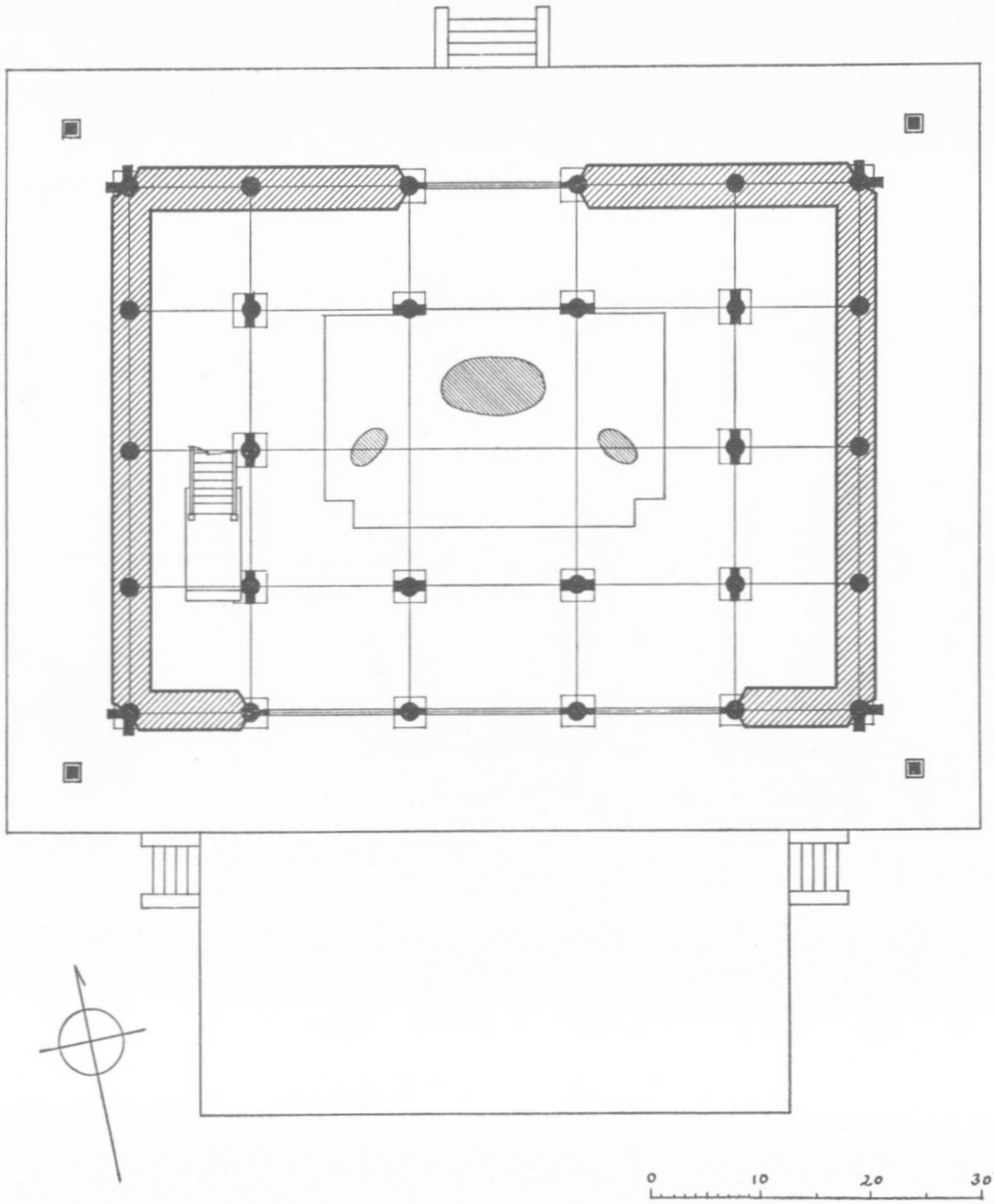
斗栱間には、中央の三間には三重肘本の平斗栱を容れてゐるが、其下に束又は板蟇股の類を用ひざるは、斗栱の猶完成の域に達せざるもの何となく物足らぬ心地がする。又端の間には全く平斗栱の類を缺いてゐる。

軒は地垂木圓に、飛檐方なれども、既記の如く後世の改修により頗る貧弱の觀を呈してゐる。

第一圖　獨樂寺觀音閣平圖面



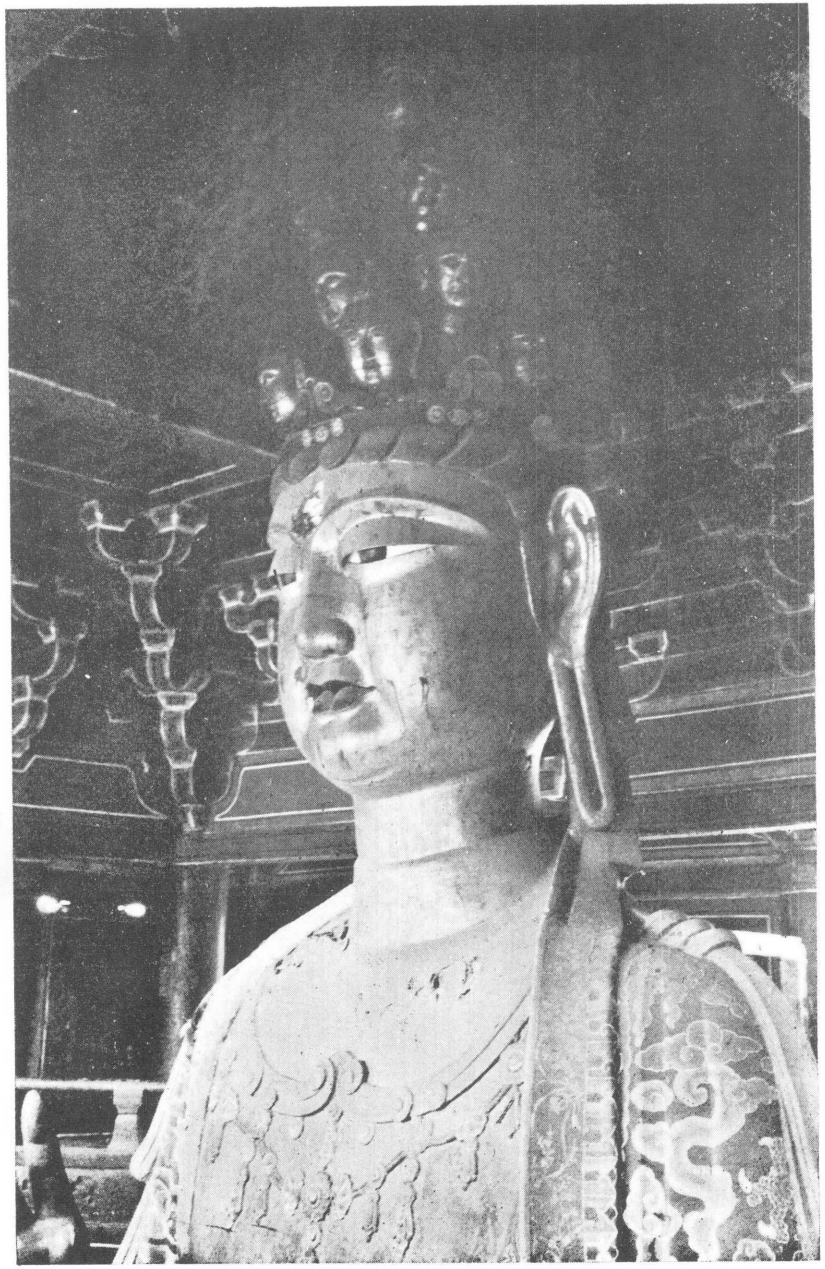
上層



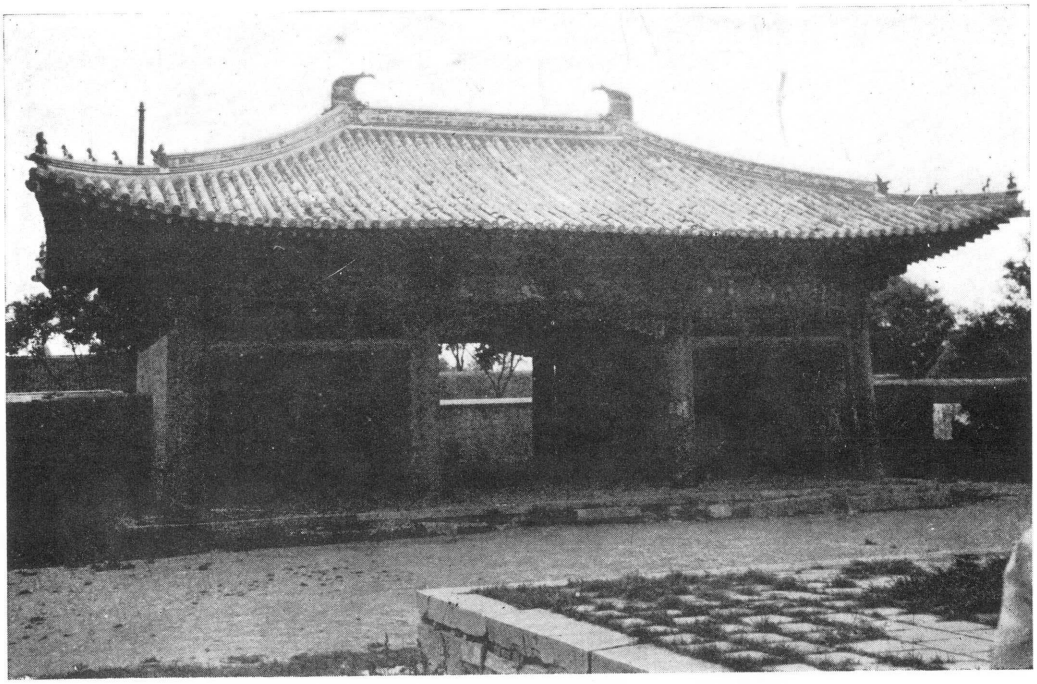
初層

昭和六年六月五日實測

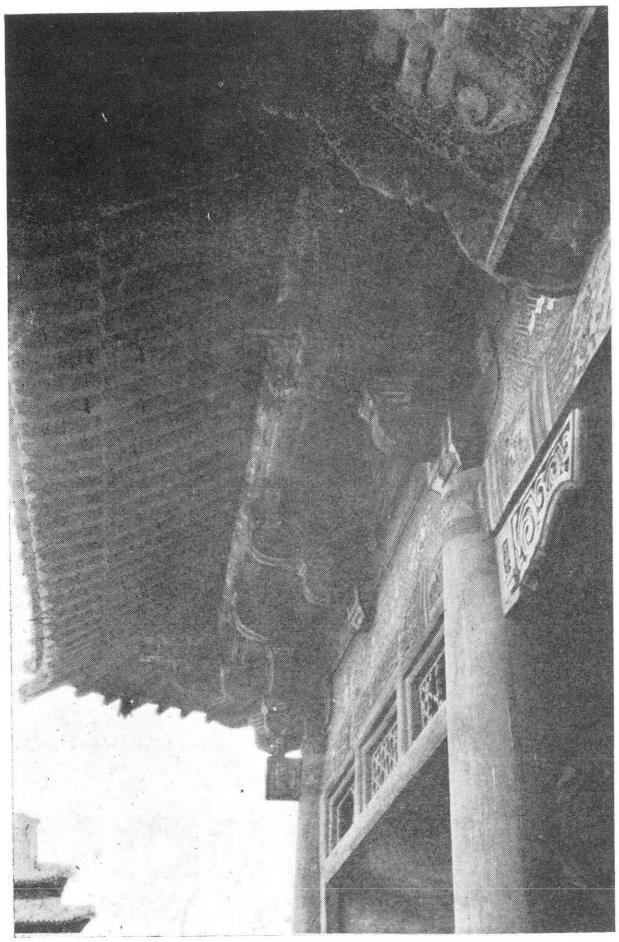
第三圖　同右脇侍像



第二圖　獨樂寺觀音閣　十一面觀音像

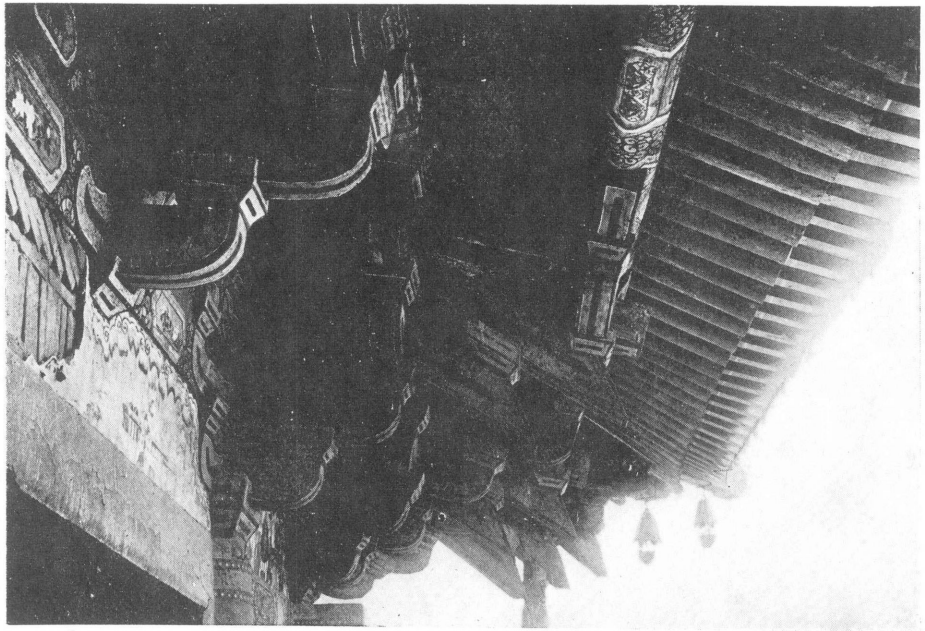


第四圖　獨樂寺山門

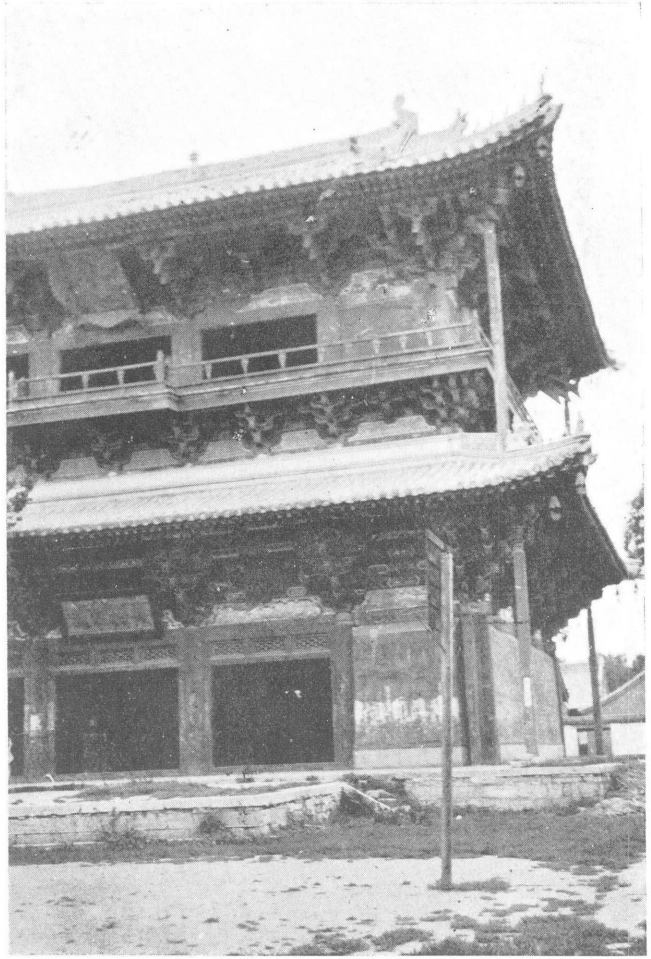


第六圖　獨樂寺山門細部

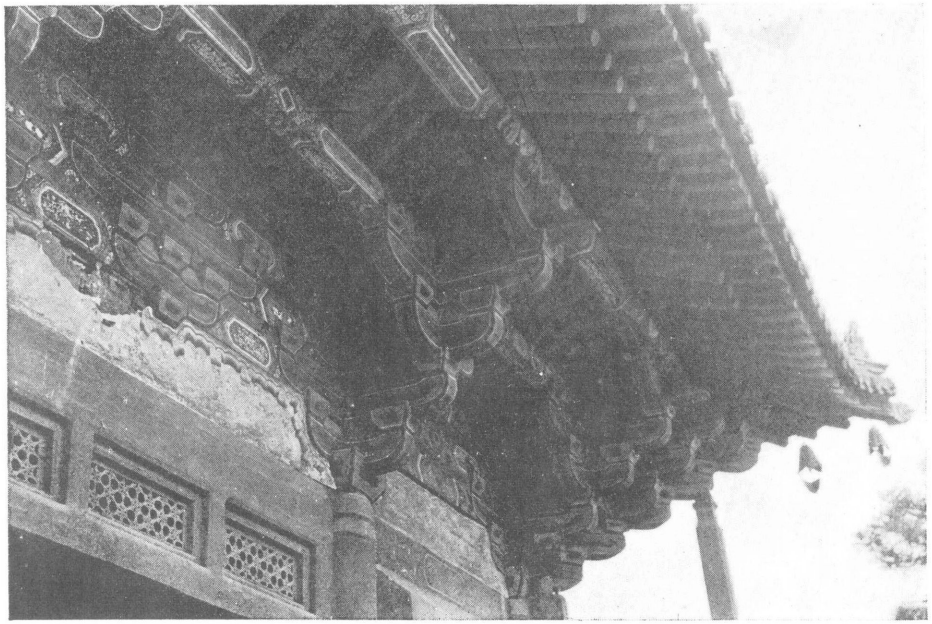
第五圖　獨樂寺山門金剛力士像



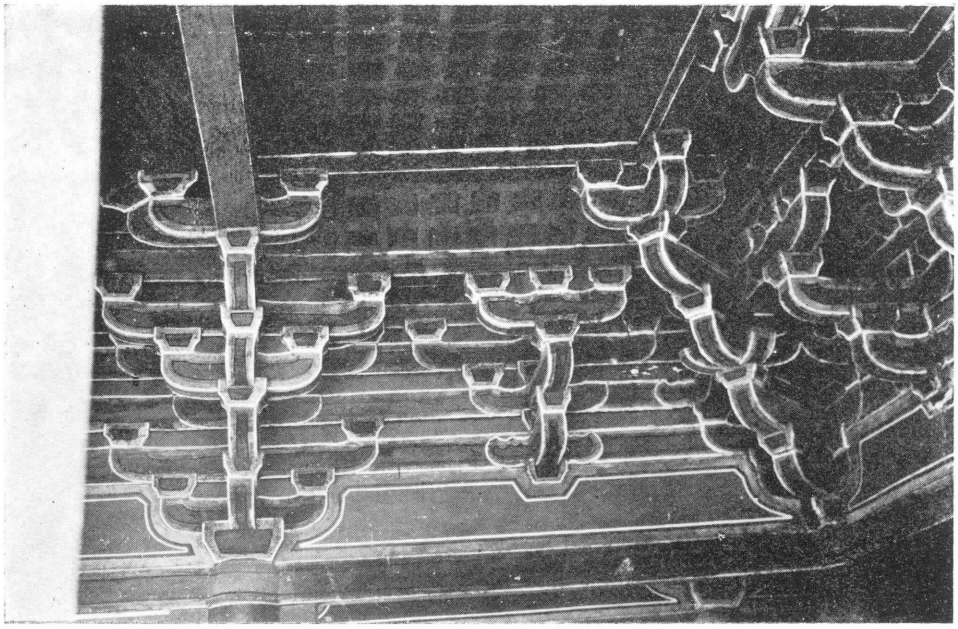
第八圖　觀音閣上層斗栱



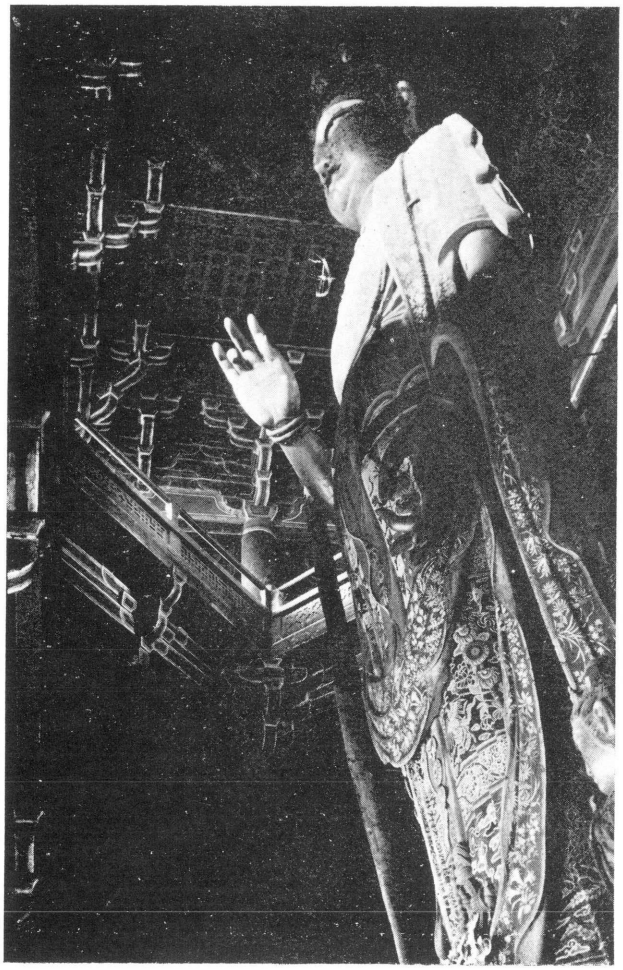
第七圖　觀　音　閣



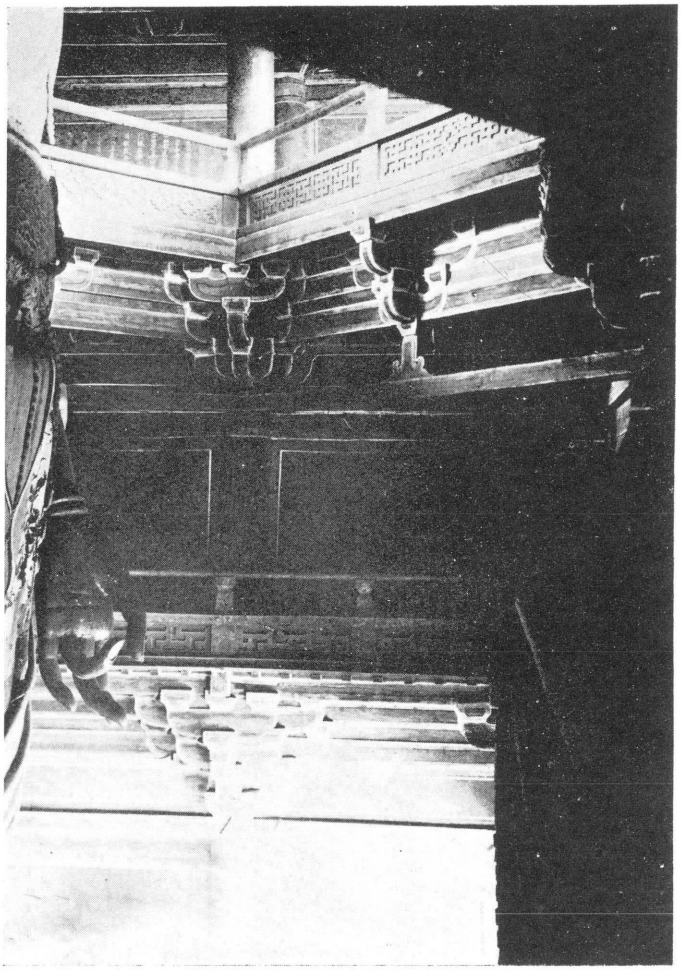
第九圖　獨樂寺觀音閣下層斗栱



第十圖　觀音閣內部上層斗栱及天井



第十二圖　觀音閣十一面觀音像



第十一圖　觀音閣內陣細部

前面三處の入口には今扉無く、花狹間を有せる欄間が在る、當初の者か後世の改補か不明である。

上層亦五間四面にして中央前三間を入口となし、他の間を壁となし、周圍に廻縁を設け、二手先詰組の腰組物を以て之を支承し、勾欄を繞らしてゐる。上層の斗栱は四手先にして、三手先四手先には二重に尾垂木を用ひ、尾垂木の端を斜に切り去つてゐる。又其端を垂直に切りたる拳端を有せるは頗る古制である。頭貫の端も亦同樣に垂直に切り放してゐる。

斗栱間には二手先の斗栱を用ひ、其下に亦束若くは板蟇股の類を缺くこと下層同樣である。

內部は周圍一間通りを外陣となし、中央三間二面を內陣となし、唐樣風の刳形を有せる佛壇を設け、勾欄を繞らしてゐる。頗る古式なれども、當初の者なるや否やは不明である。壇上中央に高さ五丈餘の立觀音像を安置し、其左右に高約十尺の脇侍立像（梵天及帝釋天か）を安置してゐる。

殿內に此の如き大像を安置するを以て、內陣の天井を上層まで洞開して二重に造つてゐる。初重は二手先の斗栱を用ひ、周圍に勾欄を繞らしてゐるが、一種の雷文形櫺子を容れたるは、其手法我法隆寺金堂五重塔及び東大寺法華堂佛壇の勾欄を想起せしめる。上の重は床を扁六角形に切り開き、また二手先の斗栱を用ひて勾欄を承けてゐる。勾欄の平桁地覆間には、一種複雜な雷文櫺子を容れてゐる。斗栱間亦二手先の斗栱を用ひ、之を承くるに板蟇股樣の奇なる斗束を以てしてゐる。此初重及上の重へは殿の西方に設けられたる木階段により上下すべく、觀音の大像の腰部と胸部の周圍を回覽することができる樣になつてゐる。

殿の上層の天井は組入天井にして、四手先の斗栱によりて支へられ、特に大像の上部を八角錐形に上げ、各隅梁間を三角菱形に組上げてゐる。

上層の外面には廻縁を繞らし、三手先の腰組を以て之を支へ、特に前面中の間に當れる處を廣く作り出し、總體に勾欄を設けてゐる。

內外共に色彩を以て裝飾してゐるが頗る簡素である。唯外部の頭貫や通肘木丸桁小壁等に文樣を彩繪せるは後世の補加である。

屋根は本瓦葺にして、巴瓦唐草瓦に往々遼時の者と思はるゝものが猶遺存してゐる。大棟の中央に塔形を載せ兩端に鴟吻を上げ、下棟の端に一種の旁吻、隅兒棟の上に走獸を載せてゐるが、近づき見ることができぬから確かに年代を言ふことができぬ。

內部に安置せる立觀音の大像は塑造にして、其高さを概測せしに、下層の床より上層の床上まで三十三尺八寸、上層の床より大虹梁の下端まで約十五尺、それより觀音の頂まで約三尺であるから、像高約五十一尺八寸となる。塑像として此の如く偉大なる者は他に發見することが出來ぬ。後世の補修加彩あれども、大體の姿勢は當初の俤を存し、權衡よく整ひ面相亦頗る溫和端嚴の精神を露はしてゐる。

觀音大像の前面左右に、脇侍（梵天帝釋天か）の塑像が立つてゐる。共に高さ約十尺惜むらくは右脇（向つて左）は右手を失ひ、左脇は右眼を傷け左手を失つてゐる。

今此兩脇侍を見るに、相好溫雅端麗にして姿態整齊、衣文の褶襞頗る寫實風にして、而も穩健後世の補修少くよく當初の樣式を傳へてゐる。唯彩色文樣は近代の改描に係れども、亦大體に於て昔時の餘

影を存してゐる。其様式猶唐の遺風を存し、我寧樂時代の彫刻の餘韻が窺はれる。實に現存遼代最古の遺作にして又無比の傑作である。

三、觀音閣及山門建立の年代

余は一見して觀音閣及び山門が遼時の建築たることを知りしも、今寺域内には一の石碑も存せず、小學校の教師に建立の年代を問ひしも、何の要領をも得なかつた。北平に歸還後中國營造學社に至り朱啓鈐氏及び關鐸氏等に遼時建造物發見の顚末を語りしに、其後間もなく關鐸氏より左の如き光緒順天府志所載の書拔きを惠まれた。

（順天府志二十五、薊州）獨樂寺、在州治西南、寺不知何時創建、遼時沙門圓新居之、（據感化寺窣堵波記）統和二年、僧談眞重修、有統和四年翰林院學士承旨劉成撰碑（盤山志）、中有傑閣、設大士像、相傳盤山舍利塔神燈、自塔而下、先獨樂而後及諸佛刹云、（薊州志）

是れにより遼の統和二年に重修せしことを知り、此重修は確かに再建たるべきを想像し、余の遼時建立の推定が誤らざりしことを喜んだ。而も府志に重修と記してあるから、古き建造物を修理したのをいふのか、新たに再興したことをいふのか判然せぬ。元來支那にては修理の場合にも新に再興する場合にも重修といふ文字を使用するから、遼時の建築たることを確定するには、更に一段の研究を要する。

余は其後大同に往き、下華嚴寺の薄伽敎藏を調査して、天井の梁下に重熙七年の墨銘あるを發見し、遼代建築の研究上、一の正確なる標準を得た。又明治三十五年伊東博士の調査された山西應縣佛宮寺の木塔は、遼の清寧年間の者である。此兩建造物の様式と獨樂寺觀音閣及び山門の様式とを比較すれば、彼此互に一致する所あり、年代に於て相距ること遠からざる者なることを知つた。

今此論文を草するに當り、忽忙の際充分の研究を遂ぐること能はざりしも、幸に文獻上遼時の者たるべき確證を得た。左に之を概說する。

余は先づ光緒順天府志を見しに、關鐸氏の惠まれた記事の外、唯

國朝乾隆十八年賜帑重修（舊聞考百十四）

の記載があり、乾隆十八年に修理を施したことが分かつたのみである。又別に其百二十八藝文の項に、

獨樂寺修觀音閣碑（存劉成撰并正書　統和四年孟夏在薊州本寺）

と記せるのみにて、碑文は載せてゐない。薊州志卷三壇廟の項には、

獨樂寺、在西門內、閣上一遍額觀音之閣、唐李太白書、

卷一明の王于陛の「獨樂寺大悲閣記」には「創寺之年遐不可考、其載修則統和巳酉也」と載せてゐる。巳酉は統和二十七年であるから、碑の統和二年說と相違してゐる。此二十七年說は何れより出でしものか不明である。

京畿金石考卷上には、

遼修獨樂寺觀音閣碑

劉成撰正書、統和四年四月立、在翁同山中

とあるから、順天府志の本寺に在りとあるのに異り、翁同山中に在ることゝなつてゐる。此他寰宇訪碑錄にも、

重修獨樂寺碑（劉成撰正書　統和四年）　直隷薊州

とあるのみにて是れまた本文を載せてゐない。順天府志に劉成碑の

事は盤山志に載せてあるやうに記してあるから、盤山志を詳細に調査せしも終に碑文は見當らなかつた。而るに朱彝尊の日下舊聞を見しに幸に碑文の要領が抄出してあつた。曰く、

獨樂寺、不知創自何代、至遼時重修、有翰林院學士承旨劉成碑、統和四年孟夏立石、其文略曰、故尚父秦王、請談眞大師入獨樂寺、修觀音閣、以統和二年冬十月再建、上下兩級東西五間南北八架、大閣一所、重塑十一面觀世音菩薩像（盤山志）

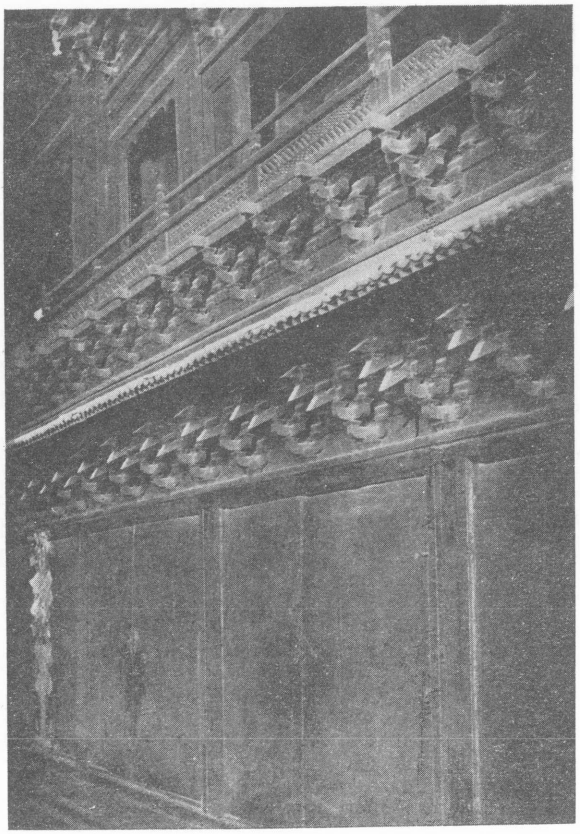
是れによれば、故尚父秦王が談眞大師を請して獨樂寺に入らしめ統和二年其觀音閣を修した。而も此修したのは明かに上下兩級東西五間南北八架の大閣一所を、再建せしことを指したのである。是れ卽ち今の觀音閣に外ならず、重層にして東西五間南北八架といふのもよく現狀と一致してゐる。當時新に觀音像を塑したといふのは、無論、今の觀音大像であらねばならぬ。

第十三圖　大同下華嚴寺薄伽教藏細部

此記事により統和二年に觀音閣が再建され、そして其形態が今の觀音閣と同樣なることが明かになつた。而も猶考慮を要するは今の建物が果して再建當時の者なりや、後世の改建を經たる者にあらずやの問題である。是れを決定するには專ら建物の構造樣式より檢討して果して遼時の者と認むべきものなりや否やを知らねばならぬ。

遼時の建築として最も正確に年代の知らるゝは、既記の如く梁下に重熙七年（西曆一〇三八）の年號銘を有する下華嚴寺の薄伽教藏である。其樣式を此觀音閣と比するに彼此互に一致する所が多い。卽ち、

（一）斗栱は觀音閣の初層は四手先、薄伽經藏は二手先の差あれども、肘木の刳形は共に數個の內彎弧の連續より成り、そして共に笹



第十四圖　大同下華嚴寺薄伽教藏內經閣細部

刳を上面に有してゐる。拳端の端を斜めに切り去れること、通肘木の面に肘木の形を淺く造り出せることも兩者同樣である。

(二)觀音閣上層の斗栱は四手先にして、第三第四の手先は其端を斜に切り去れる二重尾垂木となれるは、全く薄伽經藏內部の經閣の斗栱と一致してゐる。但し前者の拳端の端を垂直とせるは、後者の斜に切り去れると多少の相違あれども、前者の初層に用ひられた拳端は、前記の如く後者の者と同樣である。

(三)觀音閣上層の柱間に當れる所に、二手先の斗栱を容れたるは詰組の先驅にして、其手法全然薄伽敎藏の者と同樣式である。

(四)觀音閣內部上層の勾欄の雷文樣樞子は、薄伽敎藏內部經閣上層の勾欄の雷文樣樞子と頗る似たる所がある。

此の如く樣式手法の彼此一致せるは、其年代の極めて接近せるを語る者にして、薄伽敎藏が遼時の者であるならば、觀音閣は無論遼時の者であらねばならぬ。

次ぎに兩者間多少の相違ある點を擧ぐれば、

(一)觀音閣の柱の上には、臺輪を缺けども薄伽敎藏には臺輪を有してゐる。

(二)前者の天井は所謂組入天井を用ふれども、後者は格天井にして格間に彩色を以て、蓮花文樣や天人文樣などを描いてゐる。

臺輪は我飛鳥時代の建築中法隆寺の金堂五重塔等に無く、法起寺三重塔法輪寺三重塔等に存してゐるから、支那にては早く南北朝時代より臺輪を使用せし建造物も使用せざる建造物もあつたのである。隨つて其有無により時代の先後を決することはできぬが、兎に角觀音閣に臺輪の無きは、唐以來の制度を襲用せしものである。

又天井の組入となつてゐるのは、我國では主として飛鳥寧樂時代より藤原時代に及んでゐる。此觀音閣の組入天井又南北朝隋唐よりの傳統的手法である。支那にては宋金以後余の見たる殆んど總ての建造物は、格天井を用ひてゐるから薄伽敎藏の格天井よりも、觀音閣の組入天井の方が寧ろ古制を示せる者である。猶此他內外斗栱勾欄の樣式に於ても、觀音閣の方が薄伽敎藏よりも簡古素樸の風があるから、年代に於て彼よりも一步先だてる者と推想される。觀音閣は碑によれば統和二年（西曆九八四）の再建にして薄伽敎藏の重熙七年（西曆一〇三八）に先だてること五十四年なれば、此推想は文獻と符合する。そして觀音閣は統和二年再建のまゝ今に遺存せるものにして、後世の改建を經しものにあらざることが明白となつたのである。

猶一層此斷定を裏書する爲めに、他の遼代の遺構と認むべき建造物との比較を試みやう。

遼時の他の建造物にして文獻上稍正確に年代を決すべき者に、山西應縣佛宮寺の八角五重の木塔がある。文獻は不明であるが、樣式上遼時の者と認むべき者に、大同の上華嚴寺大雄殿と善化寺（南寺）大雄殿及び鼓樓とがある。先づ年代の稍正確なる佛宮寺木塔より說くことゝする。

佛宮寺八角五重木塔は早く明治三十五年に伊東博士の踏査あり、其報告は建築雜誌第百八十九號（明治三十五年九月刊行）に載せてある。昨年余等大同に往きし時、佛宮寺の調査を企てしも、時恰も、雨期に入り連日降雨河川亦暴漲到底往訪の途なかりしを以て、遺憾ながら計畫を中止し北平に歸還した。而も伊東博士の報告と建築學

會編纂の「支那建築」上卷に掲載せる同博士の寫眞とにより、大體の樣式を知ることができる。

木塔の年代は、伊東博士報告同治の「重修佛宮寺碑記」及び光緒の別碑には何れも遼の清寧二年の建立とす、又應州續志山川の項には「郡志云遼清寧二年建」と載せ佛宮寺に關しては、

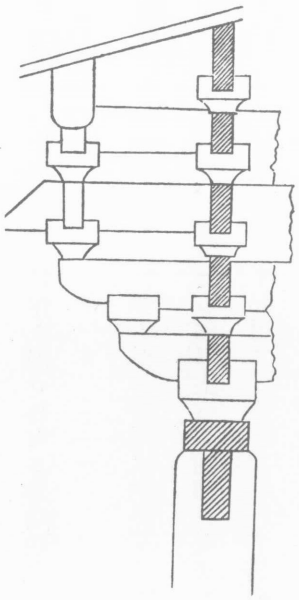
通志云、舊志載、晉天福間建、遼清寧二年重修、考田蕙記、寺無舊碑文、僅得石一片、書遼清寧二年田和尙奉勅募建十二字、郡志州志皆本此、不知舊志何據豈寺權輿於天福、而木塔則肇自清寧也耶、

と載せ、天福の創建も木塔の清寧建立も、確かなる根據の無きを指摘してゐる。又朱彝尊の「應州木塔記」には「建自遼清寧二年」と何の疑も挿まず、清寧二年の造立としてゐる。要するに此木塔は下華嚴寺の經藏の如き的確動すべからざる憑據なきも、清寧二年說は經藏の樣式との比較研究上信賴するに足るべきものと思ふ。

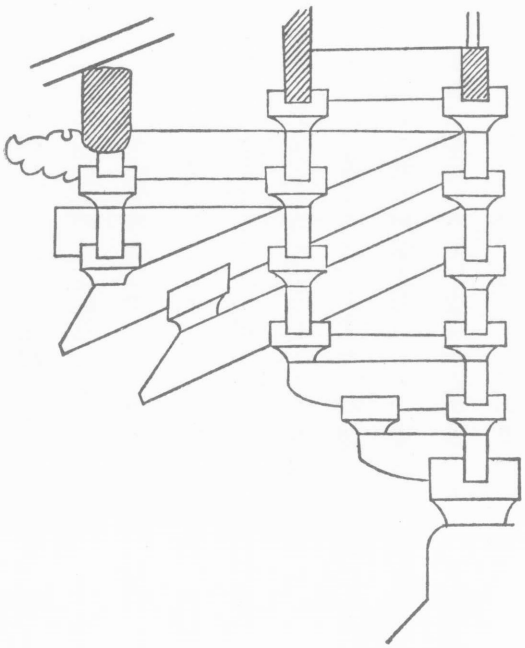
今此佛宮寺木塔と獨樂寺觀音閣とを比較するときは頗る樣式の相類似せるを見る。卽ち

(一)伊東博士によれば、佛宮寺木塔の裳層柱上にある斗栱は二手先にして、其樣式よく觀音閣初層の者に似其拳端の端を斜に切り去りたるも同樣である。

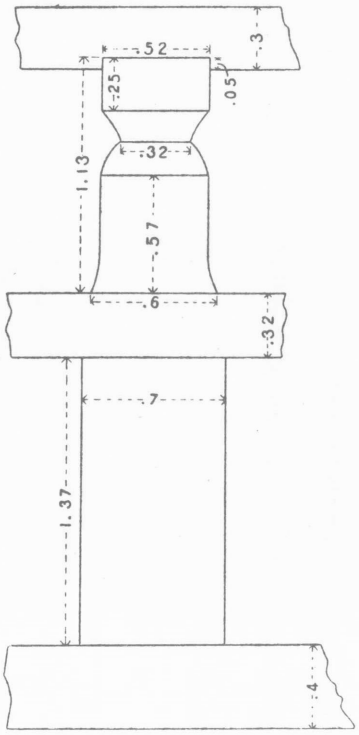
(二)木塔初層の斗栱は四手先にして、其手法全く觀音閣の上層の者と一致してゐる。唯前者にある拳端が後者に缺けてゐる。而も



第十五圖　應州佛宮寺木塔裳層斗栱



第十六圖　初層斗栱



第十七圖　應州佛宮寺木塔二層高勾欄

此異様の刳形を有せる拳端は、觀音閣上下層内部柱間に當れる斗栱の第一の通肘木の面に作り出されたる拳端様に、性質頗る近似してゐる。

(三)木塔の裳層脇の間にある斗栱を承くる所の斗束の下に、板蟇股様を作つてゐるが、觀音閣の内部上層の勾欄を支ふる腰組中間の斗栱にも、同性質の斗束を用ひてゐる。そして此種の斗束は宋の營造法式にも載つてゐる。

(四)木塔に使用せる勾欄の斗束の形狀手法は、全く觀音閣の者と一致してゐる。

要するに觀音閣の細部の様式は、よく木塔の者と似てゐるが、木塔の斗栱が殆んど完全なる詰組に近きまで發達せるにも拘はらず、觀音閣は之れに到達せんとせる道程にありて、處々局部の猶成熟せざる所がある。又前者には斗栱の上部に刳形を有せる立派な拳鼻が作られてゐるが、觀音閣にはまだそれが顯はれてゐない。是等の點より考察すれば木塔は觀音閣よりは年代に於て相當に後れたるものと思はる。觀音閣は統和二年に再建され、木塔は文獻に散見するが如く清寧二年（西暦一〇五六）に建立された者とせば、其間七十二年の歳月が經過してゐる。其間に様式上今説きしが如き相違の發達を見ることは當然であらう。故に木塔が遼の清寧年間の者とせば、觀音閣はそれより下る者にあらず、隨つて統和再建後更に後世の改建を閲した者でないことが明白となつた。

次ぎに上華嚴寺の大雄殿善化寺の大雄殿及鼓樓亦様式上遼時の建築と認めらるるものであるが、今之を細論するの遑はない。又之を細論するの必要もない。唯是等の建造物は下華嚴寺の薄伽教藏や佛宮寺の木塔と同性質の細部を有し、隨つて獨樂寺の觀音閣とも同様の様式を有し共に遼時代の建築群の中に一括さるべきものであることを言へば足りると思ふ。

結　尾

以上論ぜしが如く獨樂寺の觀音閣は、遼の聖宗の統和二年の再建に係れる者にして北宋の太宗の雍熙元年我圓融天皇の永觀二年に相當し、今より九百四十八年前の者である。即ち我藤原時代の醍醐寺五重塔（天暦五年、西暦九五一）に後るゝこと三十年、平等院鳳凰堂（天喜元年、西暦一〇五三）に先だつこと六十九年、實に今日支那に於て知られたる最古の木造建築に屬するのみならず、規模宏壯手法亦雄大、特に内陣の造構は偉大なる觀音の立像を容れんが爲め、頗る奇巧を極め、具さに良工苦心の蹟を見る。此の如き特殊の構造は全く他に類例を發見することが出來ぬ。當時佛教の隆盛に伴ひ、建築術の發達の異常なるものありしことを想像せしめる。

更に吾人の注目に値するは、本尊十一面觀音の立像にして建物と同時に成り、假令後世の補修加彩あるも、猶當初の俤を存し、全高五十餘尺の偉軀は塑像としては支那最大の者である。又其脇侍の立像は晩くも遼時代を下らず、稀に見る所の傑作である。

山門亦様式觀音閣に同じく、統和再興の者たるは明白にして、其構造手法遼時を代表せるのみならず、其内に安置せる金剛力士の塑像亦遼時に屬し、後の補修を經たれども大體に於て當初の様式手法を傳へた者である。

獨樂寺は古來著名の大伽藍にして、明の王宏祚の修獨樂寺記には「是州也宮觀梵刹之雄、以獨樂寺稱、寺之雄、以大士閣稱、閣之雄、以菩薩像稱」と論じ觀音閣の内陣正面に乾隆御筆「普門香界」の額を掲げ、初層の正面に咸豐御筆の「具足圓成」の額を掲げてゐる。以て乾隆咸豐時代には寺運の隆盛なりしことを卜することができる。又「獨樂晨燈」は漁陽*八景の中に數へられてゐる。以て如何に當寺が古來著名の勝區であつたかを知ることができる。然るに惜むべきは近年寺廢せられ其僧房は小學校として用ひられ、遺存せる支那最古の貴重なる建造物は其大像と共に、何等保護の道が講ぜられず、次第に頽廢に赴きつゝあるのは惜むべきことである。

* 漁陽八景とは青池春漲　白澗秋澄　采樹煙霽　鐵嶺雲横　盤山暮雨　獨樂晨燈　崆峒飛雪　瀑水流冰のことである。

芭蕉夜雨圖考

熊谷宣夫

芭蕉夜雨圖は、既に名品綜覽二二二、國華三九六に紹介せられてゐるが、其の改幀せられた現在の狀態を玆に登載しうることを徒爾としない。猶ほ此の機會に調査的な報告を爲すことを諒されたいと思ふ。

曩にめくりとして之に伴つて居た七家の題贊は大體に圖上の上段に貼られ、此圖の題贊は左記の如き順序を爲してゐる。

（上段）
太白眞玄敍及七言絶
叔英宗播七言絶
猷仲昌宣七言絶
山名時凞七言絶

（中段）
關西梵章七言絶
惟肖得巖七言律
同右再書敍
謙岩原沖　惟忠通恕
五言絶　七言絶
鄂隱惠奫七言絶

（下段）
北海彥軾七言絶
梁需題及七言絶
玉畹梵芳五言律
西胤俊承七言絶
嚴中周噩五言律

猷仲昌宣と同一紙にありし名不明の一行、山名時凞と同一紙にありし仲方圓伊敍及び七言絶は現在の裝幀にも省かれてゐる。